

《研究ノート》

ロシア民衆叙事詩における地中海世界

中村喜和

はじめに

中世ギリシアの叙事詩とロシア民衆叙事詩との関係が問題になってすでに久しい。たとえば、ビザンツの叙事詩の主人公デイゲニス・アクリタスにまつわるさまざまなテーマとモチーフが、ブイリーナと呼ばれるロシアの口承叙事詩に借用されたことは、帝政時代の最も著名な文献学者の一人 A・ヴェセロフスキイによって指摘された⁽¹⁾。ヴェセロフスキイによれば、デイゲニスの業績をうたった歌謡の中に、この勇士の死神との最後の戦いをテーマにしたものがある。デイゲニスはここで「不⁽²⁾死身」*zhivotos* と名のる。一方、ロシアの民衆叙事詩には「アニカ」*Аника* (あるいは「オニカ」*Оника*) という名をもつ剛力無双の勇士が登場する。彼はやはり死と戦ってやぶれる。「アニカ」がギリシア語 *Andros* の訛りであることは疑問の余地がない。ヴェセロフスキイはこのほかに、ブイリーナ

の比較的古い層の中にギリシアから伝わったいくつかのモチーフが混入していることを論証した。

以下の小論は、この種の比較研究ではない。これは、今なお議論が多いブイリーナの成立の時期や他民族の叙事詩との影響関係に関する問題を一応度外視して、現在知られるブイリーナのテクストの中で、ギリシアをはじめとする地中海諸地域がどのように扱われているかを考察しようとするものである。取りあえず断っておかなければならないが、アニカあるいはオニカはギリシア人としてあらわれるわけではない。また一般にヴェセロフスキイがギリシア的モチーフを含むとしたブイリーナには、ギリシアそのものについての言及がない。アニカがブイリーナで活躍する主要な勇士たちのグループに属さぬことを指摘しておくのも無意味ではあるまい。

ブイリーナのテクストについて一言。ここで用いるのは、ひとまず、パーヴェル・ルイブニコフとアレクサンドル・ギリフェルジングがそれぞれ一八六〇—六五年、一八七一年に、ともに北ロシアのオネガ湖周辺で採録したものに限定した。前者が集めたブイリーナは百六十五篇、後者のそれは二百七十篇をかぞえる。現在まで約百のテーマについて合計二千あまりのブイリーナのテクストが伝わるといわれるので、この二人が収集したブイリーナは量的には全体の何分の一かにすぎないが、この時代のオネガ地方にはすぐれた語り手が輩出したので、質的には、現存するすべてのテクストの中で最良の部分なしている。何よりも、特定の地方で比較的短期間にかなり網羅的に採録さ

れた点に、ここで資料として利用する好都合な条件がみとめられた。以下引用にさししては、ルイブニコフはD、ギリフェルジングはΓをもって示し、テクストの番号は次の注(2)と(3)に掲げる版によって数字であらわす。

(1) A. H. Веселовский, *Отрывки византийского эпоса в русском. Вестник Европы*, 1875, кн. IV, стр. 750—775.

(2) *Песни, собранные П. Н. Рыбниковым*, 2-е изд., т. 1—3, М., 1909—1910, No. 213. (たなむぢd・二二三) オニカの代りに、ブイリーナの代表的な勇士の一人ドブレイニヤが死と戦うヴァリアントもある(たとえはd・二二二)。ヴェネローフスキイによれば、モイゲニス歌謡における生と死の闘争のテーマは、シチリアを経てドイツなどに伝わったと云う。

(3) A. M. Астрахова, *Былины*, М.-Л. 1966, стр. 187, 191. の計算による。両者の「歌謡集」に収められたテクストの数はもっと多いが、アスターホヴァは純粹にブイリーナと考えるテクストのみをかぞえたのである。なおルイブニコフについては注(2)で挙げた版「ギリフェルジンク」については左記の版を用いる。*Онежские былины, записанные А. Ф. Гильфердингом летом 1871 года*, т. 1—3, СПб., 1894—1900. (Сборник отделеения русского языка и словесности Имп. Академии Наук. т. LIX—LXI.)

(4) Ю. М. Соколов, *Русский фольклор*, М., 1941, стр. 214. によれば、テクストは「約二千」。その後刊行されたものは数百篇にのぼるはずである。ただし新しいテクスト、とりわけ第二次大戦後に収集されたものは、質が低下している。最近のブイリーナ衰微の状況は次の論文に詳し。Э. В. Померанцева, *Судьба бытового эпоса в последние годы. Русская литература*, 1963, No. 4, стр. 119—124.

ロシア民衆叙事詩で言及される地中海世界の地名は、エルサレム、ギリシア、ツアブリグラード、サラセン、トルコである。まずエルサレムからはじめよう。当然のことながら、この町はもっぱら聖地として意識されていた。エルサレムを舞台にしたブイリーナに、ノヴォホロドの無法者ワシリーイ・ブスラーエフの死をテーマにしたものがある。故郷の町でひと暴れたワシリーイは、仲間とともにエルサレムへ巡礼にやってくる。彼は母のいましめにそむき、裸になってヨルダン川で泳ぐ。シオンの丘まで来ると石があり、その石には三度これをとび越すと無事に主の教会にたどり着けると刻まれている。ワシリーイは三度目に後向きにとほうと試み、落馬して死ぬ。傲慢と不敬に對して神罰が下さるべき場所として、聖地は最もふさわしいと考えられたにちがいない。

エルサレムに詣でる巡礼を主人公とするブイリーナは「四十

人の巡礼たち」である。彼らは、

エルサレムの町に到着すると

主なる神に祈りをささげ

主の御座に口づけをし

ヨルダン川で体を清め

犯した罪の許しを乞うた。

(Γ・七二)

これが典型的な聖地巡礼の描写である。ただしこのブイリーナの主要舞台はキエフであって、エルサレムではない。

このほか「イリヤ・ムーロメツとイドリシチエ」(P・一一八、Γ・四八)、「ソロヴェイ・ブジミロヴィチ」(Γ・六八)、ドブリニヤに関するいくつかのブイリーナ(P・八、Γ・二一五)に、エルサレムに出かける巡礼や、勇士がこの町に滞在するモチーフがあらわれるが、それらはいずれも筋の展開に対して本質的な意味をになっていない。

ギリシアはロシア人にとって特別の存在であった。言うまでもなく、ロシアはギリシアからキリスト教文明を受容したからである。

ブイリーナは、ロシアを侵すもの、未開なるもの、魔術的なものとロシアの勇士との闘争を最大のテーマにしているが、その闘争でキリスト教が有力な武器の一つとして意識されたことは、次の例から知ることができる。

最も広く知られるブイリーナの一つに「ドブリニヤと大

蛇」がある。成人したばかりの勇士ドブリニヤは、母のもとから旅に出る。プチャイ川まで来ると、母の忠告を忘れ裸になって泳ぎはじめた。たちまちそこへ翼をもつ大蛇が襲いかかる。格闘して打ち負かされそうになったとき、ドブリニヤは川岸にころがっていたギリシア渡りの頭巾 *korinak zemni petchok* を見つけ、この頭巾で大蛇をたおす。頭巾は柔毛でつくられていたり、ギリシアの土がつまっていたり(P・二五、Γ・五、七九、一五七)、明瞭に兜状であったりする(Γ・一七一)。頭巾にせよ、兜にせよ、敵と渡り合う武器としては正常ではない。ギリシアの頭巾 *pepeteckaj ulitna* は巡礼の通常の装束の一部をなしているので、この場合の *korinak* もキリスト教そのものの象徴とみる意見が定説となっている。

ロシアの勇士が頭巾をもって敵をたおすモチーフは、このほか、イリヤと異教徒イドリシチエ(P・八七、Γ・四八)、同じくイリヤと盗賊たちとの戦い(「イリヤの三つの旅」P・一五四、一七六)の一部のヴァリアントにみられるが、この場合にはその頭巾がギリシア製であると特定されていない。ドブリニヤにおけるギリシアの頭巾は、異教が大蛇によって象徴されることと対応していると考えべきであろう。

「四十人の巡礼たち」のあるヴァリアント(Γ・三〇一)では、巡礼の出発地が「ツァリグラード」である。ツァリグラードは皇帝の町、すなわちコンスタンチノープルを指し、ブイリーナではつねにこの形であらわれる。「イリヤとイドリシチエ」には大別して二つのヴァリアントがあって、一方ではイリ

ヤーが怪物めいた邪教の侵略者イドリシチエをキーエフでたおしてウラジーミル公を助けることになっている(P・六ほか)のに対し、他方では舞台はツァリグラード、救う相手はコンスタンチン・ボゴリュボヴィチである(P・一一八ほか)。とはいえ、キーエフについても、ツァリグラードについても固有の風景描写はないので、これら二つの地名を入れ替え、ウラジーミル公とコンスタンチン帝を入れ替えても、筋の運びには支障がない。第二のツァリグラードのヴァリアントではイリヤの「愛国者」的色彩は稀薄となり護教者の役割が前面に出るので、これを教会の利益のためにイリヤナを利用しようという試みのあらわれと解釈する意見がある。勇士と邪教徒との戦いをテーマにするイリヤナは数多いにもかかわらず、ツァリグラードが主要舞台となるのは、このヴァリアントだけである。巡礼姿のイリヤナがコンスタンチン帝の君臨するツァリグラードにおもむき、無銭で酒を痛飲したあぐく寝入ってしまうというごく短いテキストが一つ伝わっているが(P・一七五、Γ・二二〇。語り手は同一人)、これは上記ヴァリアントのさらに一変種と見なすべきであろう。

ドブルーニヤともう一人の勇士アリョーシャとの争いをテーマにしたイリヤナでは、前者がツァリグラードに出かけて三年あるいは六年を過ごすあいだに、アリョーシャがドブルーニヤの妻に言い寄る。しかしここでも、ギリシアあるいはツァリグラードの風景の描写は全くない。

おそらく近代以前のロシアの農民にとって地中海世界がいかに

なる意味をもったか最も端的に示しているのは、「ドブルーニヤとアリョーシャ」の次のエピソードであろう。ウラジーミル公夫妻の仲人で、アリョーシャはドブルーニヤの妻アナスタシアと婚礼を挙げる。旅先きでこれを知ったドブルーニヤは大急ぎでキーエフに駆け戻り、旅芸人に身を変えて婚礼の宴にかける。彼はグースリをかなでて公の注意をひき、アナスタシアの真向かいの席を与えられる。そしてなみなみと注いだ酒盃の中に自分の指輪を投げ入れて、妻に自分の正体を告げる。オデュセイアを思わせるこの場面のととで、ドブルーニヤは公を非難し、アリョーシャをこらしめてイリヤナは終る。旅芸人、実はドブルーニヤがグースリを弾くもようはこううたわれる。彼は、

黄金をかぶせた絃の上に

絹^絹纏りの絃を張りわたし

絃から絃をつまびきながら

声をあげてうたいはじめた。

その節はツァリグラード風で

歌の言葉はキーエフの昔や今を

ことごとくうたい込んだものだった。

(P・二二六、Γ・一四九)

ギリシアの歌の調べがウラジーミルはじめ並みいるロシアの貴族や勇士たちの心を動かし、歌い手は褒美として自分の好む席にすわる権利を与えられる。五行目について次のようなヴァリアントもある。

あるいはツァリグラードの歌を
あるいはエルサレムの歌をうたった。

(Γ・一〇〇)

ツァリグラードの歌をたくみにうたい、

ツァリグラードからエルサレムの歌まで

エルサレムからサラセンの地の歌までうたった。

(P・八)

この場面は、十一世紀にキーエフの教会の壁にフレスコで描かれた楽師たちの姿を連想させる。右のバイリーナ以外でも、スターヴェル(P・一三三)とソロヴェイ・ブジミロヴィチ(P・一四九)のバイリーナの一部のヴァリアントに、これらの勇士がツァリグラードやエルサレムのメロデーをかなでるモチーフが稀にあらわれる。

ツァリグラードとエルサレム、あるいはそれにサラセンを含む地中海世界は、ロシア人の心を魅了する歌の調べがそこから伝来する世界であった。バイリーナにおける外国の中で、このような形で名ざされている地域は、ほかに一つもない。

サラセンは、実はエルサレムやツァリグラードとは異なり、一義的に文明の概念とは結びついていなかったと考えられる。

バイリーナにあらわれる「サラセンの地」Сара́йская (Солонская) земля は、「ドブルーニャが無数の蛇の子を馬の蹄で踏み殺す場所、また彼に襲いかかる翼もつ大蛇の棲処であり(P・四〇ほか)、キーエフの公が貢を納めるべき国であり

(「ドブルーニャとワシリーイ・カジミロヴィチ」P・八)、ごく稀に富裕な勇士デュークデュークの生まれ故郷である(P・一八一)。

デュークの大部分のテクストでは、彼の故郷は実在の地ガリーチである、同時にインドである。またなぜかサラセンの名は大部分の場合山と結びついていて、この山でドブルーニャが蛇と戦った(P・二五ほか)、ワシリーイ・ブスラーエフが髑髏ヒナカに出会ったり(Γ・四四)、ロマン公がここでリトワ勢をやぶったりする(「リトワ勢の襲来」P・四五)。ロシア人のような平原の民族にとって、山はそれ自体エキゾチックな雰囲気をもっていた。ほかにサラセンの名を冠したものに、樅の木(Γ・三ほか)、棍棒(Γ・九四)、巡礼の杖(Γ・四)と着物(P・六二ほか)、道(Γ・二二八ほか)、頭巾(Γ・一一九ほか)、羅紗(P・二九ほか)、手綱(Γ・二二三ほか)などがある。

十三—十五世紀にロシアの支配者であったタタール(キプチャク汗国)、ほぼ同じ時期にロシアの西方で栄えた強大なリトワ王国について、サラセンは概してバイリーナに最も頻繁にあらわれる外国であるが、タタールやリトワがロシアに敵対する国と意識されているのに比べれば、バイリーナのサラセン像はきわめて漠然としている。その漠然さにおそらく意味があるのであり、ロシアの政治的支配の及ばぬところ、ロシア人にとってかならずしも好意的でない異境が、バイリーナにおけるサラセンであったと定義できるであろう。

歴史的には、アジアからロシアに脅威をおよぼすものとして、トルコはタタールの後継者であった。したがって、勇士イリヤがこの地をさまよる(「デューク」P・一三〇)、『ドブリンヤがこの国へ貢を取りにおもむき(「シハイロ・ポトウイック」P・一五〇ほか)、ヴォリガ公がそのサルタンを征服に出かけ(Γ・九一ほか。大部分のテキストではインドが目的地である)、四十人の巡礼がここに集って聖地にむけて出発する(Γ・七二)などのモチーフでは、トルコはサラセン同様に単に遠隔の地という機能を果たしているにすぎないが、ブイリーナにおけるトルコの意味はそれだけにとどまらない。「リヤザンの娘アヴドーチア」ではトルコのサルタンあるいはパシヤのバフメートがロシアへの侵入者として名を挙げられ、けなげなアヴドーチアの願いを容れてロシア人捕虜を釈放する(P・一八二、Γ・二六〇)。スターヴェルの妻で勇婦のワシリサは「トルコ風に髪を剃」って夫を牢から救い出し(Γ・一六九)、伊達者チュリーラは赤あるいは緑色の「トルコ風の山羊皮の靴」をはいて人妻を誘惑する(Γ・一八九、三〇九)。ヴォルガが「トルコの海」に注ぐという(「ソロヴェイ・ブジミロヴィチ」P・一二三)形での結びつきも、ブイリーナにおけるトルコの具象性を高めているとみることができる。

ただしブイリーナの主要なテーマの中でトルコが何らの役割も受けもっていないのは、トルコとの接触がロシア人の民族的記憶の比較的新しい層に属するためであろう。これがロシア民衆叙事詩の成立の時期ともかかわってくることは言うまでもな

5。

(1) M. P. Фасмер, Шапка земли греческой. Сборник в честь семидесятилетия Г. Н. Потанина, СПб., 1909, стр. 45—64. に詳細な論証がある。

(2) たとえば В. Я. Пропп, Русский героический эпос, 2-е изд., М., 1958, стр. 235.

(3) 同じ情況でエルサレムとキーエフの調へを挙げるヴァリアント(Γ・二九〇)、『エルサレムとノヴゴロド』のそれに言及するもの(Γ・六五)があるが、文脈上、重点がエルサレムにかかっていることは明白である。

(4) 「四十人の巡礼たち」の中でウラジミールの后アブラクシアは「トルコ風に腕を組む」。ただしこの表現はキルシャ・ダニロフのブイリーナ集にみられるもの。Древние русские стихотворения, собранные Киршем Даниловым, М.-Л., 1958, No. 24.

二

ロシアの民衆叙事詩には東西南北の方位がそなわっている。四方位のうち東が圧倒的に優勢を示し、西と北がこれに次ぎ、南は不均衡に劣勢である。リュブニコフとギリフェルジングの「歌謡集」で各方位が言及される回数を機械的に拾えば次のとおりである。東二十一、西十四、南三、北十。東が多いのは、勇士が起床するとまず東に向かって十字を切って神に祈るという常套的な表現があり、さらにタタールが主としてこの方角か

らロシアに押し寄せるからであり、西については、太陽が西に傾くという表現が時刻の到来を示すきまり文句になっているためである。

しかし方位の意識は、ロシアをはなれて遠方には及ばない。ロシアを取り巻く外国で方位と関係づけられているのは、タールとリトワのみである。しかもタールの国(キプチャク汗国)は時にロシアの西にあたり(Γ・二二六)、時に北に位置したりする(Γ・二三三)。またリトワが東にある場合もある(Γ・一〇二)。ドブリニャの大蛇はふつう西から飛来するので(Γ・七九ほか)、大蛇の棲むサラセンの山もロシアの西方に存在することになる。パトウィガなる邪教徒はるときは東から(Γ・一八)、あるときは北から(Γ・二二)、ロシアに侵入する。すなわちブイリーナでは、外国は方位と有意味的には結びついていなかったことになる。

ギリシアあるいはツァリグラード、ならびにエルサレムは、いかなる方位とも関係づけられない。一般に地中海世界は方位を超越した遠方として意識されていたことがわかる。これよりさらに実体性にとぼしいラテン(ブイリーナにおけるラテンはカトリック教圏を漠然と示す)やインドも同様である。

ロシアから地中海世界にいたる経路も、むろんブイリーナでは問題にならない。確かなことは、キーエフからの距離が非常に大きいということである。⁽¹⁾ツァリグラードで愛馬の口から妻

とアリオシヤの婚礼のことを聞いたドブリニャが、「川と湖をとり越え、見はるかす野も一またぎ」(Γ・七二)してその日のうちにキーエフに駆け戻るのは、叙事詩特有の誇張法であり、むしろ二つの首都の地理上のいちじるしい隔たりが前提となっているのである。

ユーレイ・ロートマンは、中世ロシアの文献ではすべての土地が宗教的な意味で正か邪かの概念と結びついて意識されており、地理的空間のあらゆる移動は宗教的倫理的な垂直目盛の昇降に還元できると指摘しているが、この筆法を借りれば、ロシア民衆叙事詩の中で地中海世界こそプラスの価値をもつ唯一のはるかな異境であったことになる。

(1) 「四十人の巡礼たち」のあるヴァリアントでは、巡礼たちはキーエフから三カ月歩きとおしてエルサレムに到着す。 *Древние русские стихотворения*... No. 24

(2) Ю. М. Лотман, О понятии географического пространства в русских средневековых текстах. *Известия Труды по знаковым системам*, II. — *Ученые записки Тартуского гос. университета*, вып. 181, Тарту, 1965, стр. 210.

(一九七四・九・九) (一橋大学助教授)
* 本稿は昭和四十九年度科学研究費補助金(総合研究(A))による研究成果の一部である。